

TS（トータル・サティスファクション）を目指して⑤「自己成長」

「自分の『先生』がいますか？」

校長室担当より

「先生」とは様々な場面で使用される言葉であり、教育や医療、芸術などの特定の分野にのみ当てはまるものではありません。どんな企業や職業においても、年齢にかかわらず、一人一人に「先生」というリスペクトできる存在があって、「あんな人になりたいな。」「あんな接し方ができるようになりたいな。」という強い思い（パッション）が私たちの成長を促してくれるものです。そして、今度は自分たちが、後からやってくる人の「先生」としての役割を果たしていく順番が来る。こうして、知識や知恵、立ち居振る舞い、人間としての考え方などの「基本的な人間力」が引き継がれ、この連鎖が綿々と続いていくこととなります。実際の社会においても、「いい会社」「いい病院」あるいは「いい地域」と高い評価を受ける組織には、ほとんど例外なくこの文化が根付いています。

この基本を支えているのが、「学校」、「家庭」、「地域社会」です。学校では、先生はもちろん先輩と後輩などとの関係性から、家庭では父母や兄弟姉妹との関係性から、地域社会では近所のおじさん、おばさん、お兄（姉）ちゃんとの関係性から「人間力の基礎」を身に付けていきます。高等学校のサッカー部においても、「後輩が先輩を目指し、先輩は後輩の成長から学ぶ」という仕組みが機能しているチームには間違いなく活気があります。指導者や先輩、チームメイトの中に、憧れの存在とまではいかななくても、リスペクトの対象となる「先生」がいたら、そこには「迷いのない信頼関係」がチーム内に生まれるからです。実際に広島県でベスト4に入り、私も良い思いをさせてもらったある高等学校のチームがそうでした。

「先生」は、必ずしも先輩であったり、年長者である必要はありません。実際の学校現場にいる私たちは、子どもたちからも学ぶことが多いです。また、同じ組織やチーム内に限定する必要もありません。むしろ、限定をもたずに、「自分にはない優れた知識や能力をもった人」「人生の智恵にあふれた人」「人間性豊かな人」「話していると心が落ち着く人」など、一人ではなく、できるだけ多くの「先生」をもつことが大切

です。こうすることで、自分の思い通りにいかないことに遭遇したり、失敗や挫折をした時には、「あの人ならこんな時にどうするだろうか。」と考える拠り所ができ、解決の糸口が見つかったりします。さらに、自身がその身をもって行動として示すことで、今度は自身が他者の「先生」となることができ、こうすることで自分の「立ち位置」がわかり、さらなる自己成長を遂げていくこととなります。

私にもそんな「先生」、つまり専門語で言えば「メンター」となる存在の方が、高校サッカーの関係だけでも3人いらっしゃいます。また様々な民間セミナーでお世話になった講師や、考え方に共感した本の著者はすべて私の「先生」ですし、私が目標とするべき「先生」は、この学校の教職員はもちろん保護者の皆様の中にも複数いらっしゃいます。今の私は本当にちっぽけな存在ではありますが、私のこの存在はすべてこの方々のおかげです。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。この場をお借りして、心より御礼申し上げます。さらに成長していきたいと思えます。

(令和3年7月1日)

本校教職員として目指す方向性（確認） ※4月1日にお願ひしたこと

- 1 トータル・サティスファクションの実現
- 2 学びに向かう力をもつモデルを率先垂範
- 3 対話とパートナーシップに基づく行動
- 4 全教職員で全校の児童生徒を見守るチームの実現
- 5 「今さえ、ここさえ、自分さえよければいい」の3悪の撲滅